

ウォライタ語とカンバタ語の普通名詞の対応

若狭 基道

motomichiwakasa@nifty.com

キーワード： ウォライタ語 カンバタ語 アムハラ語 アフロアジア大語族 借用
エチオピア

要旨

ウォライタ語（アフロアジア大語族、オモ系）とカンバタ語（アフロアジア大語族、クシ系）はエチオピア南西部で話されている言語である。どちらの言語の普通名詞も語形変化の観点から複数のクラス（型）に分類される。本稿では、両言語に共通して語幹の形の類似した普通名詞が存在する場合、それらがそれぞれどのクラス（型）とどのクラス（型）で対応するのか、実例を示す。そのパターンは多様で複雑であるが、類似した語形がエチオピアで共通語として広く普及しているアムハラ語（アフロアジア大語族、セム系）にも存在する場合とそうでない場合で、違いが見られることも明らかにする。

1. はじめに¹

ウォライタ語は、エチオピアの南西部、首都アジスアベバから約 400 キロメートル離れた場所で話されているアフロアジア大語族オモ系の言語である。母語話者人口は 2007 年の国勢調査によれば 1,627,955 人である。この言語に関して筆者は 1997 年以来、アジスアベバとウォライタゾーン内の町 Boditi で断続的に調査をしている。その成果の大半は Wakasa (2008) に見られ、簡便なものとしては若狭 (2012) がある。

一方カンバタ語は同じくエチオピアの南西部、ウォライタ語地域の北部に隣接した地域で話されているアフロアジア大語族クシ系の言語である。母語話者人口は 614,752 人である。主要な先行研究に Treis (2007) がある。この言語に関しては、筆者は 2008 年以来、上述ウォライタゾーン Boditi 在住の話者の協力を得て調査を進めている。

カンバタ語の調査は基礎語彙調査と基礎的な文法調査を終え、簡単なテキストの分析を試みている段階に過ぎないが、そうした調査を通じて、これまでにウォライタ語に類似した単語が幾つも見付かっている。その理由としては、恐らく全くの偶然によるものは少ない。先ず考えられるのは、両言語が、どちらかを習得すればもう一方も話せるといったレベルではないにせよ、系統的に関係があるためである。共にアフロアジア大語族に属するとされており、オモ

¹ 本稿は、平成 19～21 年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 課題番号 19720093 「ウォライタ語 (エチオピア) 及びその周辺言語の記述的研究」(研究代表者: 筆者) の成果の一部である。

とクシを分離させないで1つの語族と考える立場すらある。もう1つ考えられるのは、接触による借用関係に由来するものである。歴史的にも両言語の話者は絶えず接触して来たと考えられる。また、エチオピアで共通語として広く普及しているアムハラ語（アフロアジア大語族セム系）の影響によるものも多いであろう。

そこで本論文では、ウォライタ・カンバタ両言語で語形の似ている普通名詞の概観をしたい。具体的には、両言語とも普通名詞が語形変化の点で幾つかのクラス（型）に分けられるが、語形が類似している場合、それぞれどのクラス（型）とどのクラス（型）で対応しているのか、を明らかにする。その際に、アムハラ語との関係にも注意を払いたい。

この間に答を出すことは、アフロアジア比較言語学にとって重要であるのみならず、言語接触の観点からも興味深く、ウォライタ語をよりよく知るためにも必要不可欠の作業であると思われる。

2. 各言語普通名詞形態論

ウォライタ語もカンバタ語も名詞類（さらに言えば、大抵の語）は「語彙的な語幹+文法的な語尾」という構造を有している。

ウォライタ語普通名詞の語尾は表 (2-1) に記した通りである。アクセントの点からはそれぞれが2つに分かれるが、ここでは無視した。見て分かる通り、4つのクラス（型）に分類出来る。その内の3つは男性名詞であり、残り1つが女性名詞である。普通名詞の性は、動詞との一致や指示詞との呼応等において重要な役割を果たす。

男性名詞がどの下位クラスに属するかは、単に、様々な変化形の基底となっていると考えられる非具体形単数絶対格の語尾がa、e、oのどの母音であるかによって決まっている。任意の名詞がどの母音で終わるのか、原則として意味等から予測することは出来ない。日本語で喩えれば、母音aで終わる名詞、母音eで終わる名詞、と分類するようなものである。以上の点では、ウォライタ語の男性名詞の分類には積極的な意味を見出し難いが、それぞれの名詞を文中で正しく語形変化させて使用するという実用的な面では重要な知識である。

純粋な女性名詞として変化する語はaayy-iyó「母」、máchch-iyó「妻」、michch-iyó「姉妹」等、ごく限られている。但し、任意の男性名詞語幹に具体形単数の女性名詞語尾を付加することで、自然性が女性であることを明示したり、指示物の小ささやそれに対する愛情を表現したりすることは稀ではない。

尚、ごく一部の例外を除き、どの普通名詞も具体形単数絶対格の形が実際の言語使用においては代表形である。即ち、物の名前を尋ねるとこの形で返答されるし、辞書の見出しにもこの形が使われている。

(2-1) ウォライタ語普通名詞語尾

非具体形

| | ABS | OBL | NOM | INTER | VOC |
|------------|-----|--------|-----|-------|----------|
| M. Class A | -a | -a | -i | -ee | -oo |
| M. Class E | -e | -e | -ee | -ee | -oo, -ee |
| M. Class O | -o | -o | -oy | -oo | -oo |
| F. | -o | -e, -i | -a | -oo | -oo |

具体形単数

| | ABS | OBL | NOM | INTER | VOC |
|------------|------|------|------|-------|--------|
| M. Class A | -aa | -aa | -ay | -ay | -awu |
| M. Class E | -iya | -iya | -ee | -ee | -iyawu |
| M. Class O | -uwa | -uwa | -oy | -oy | -uwawu |
| F. | -iyo | -ee | -iya | -ii | -ee |

具体形複数

| | ABS | OBL | NOM | INTER | VOC |
|-----------------|------|------|------|-------|-------|
| M. Class A | -ata | -atu | -ati | -atee | -atoo |
| M. Class E | -eta | -etu | -eti | -etee | -etoo |
| M. Class O | -ota | -otu | -oti | -otee | -otoo |
| F. ² | -eta | -etu | -eti | -etee | -etoo |
| | -ota | -otu | -oti | -otee | -otoo |

カンバタ語の普通名詞語尾は、未だ完全に分析が終わっている訳ではないが、暫定的に表 (2-2) に記したように纏めたい。それぞれの型の名称は、Treis (2007: 96) に従った。但し、格の名称はウォライタ語との整合性も考え、本稿独自のものとしてある。LOCの欄には空所が多いが、Treis (2007) の記述から判断して、筆者の調査不足によるものと思われる。

ウォライタ語と同じく、男性名詞と女性名詞に分かれるが、それぞれが比較的多くの型に分類されることが注目される。女性名詞の指示対象の自然性が女性であるとは限らない。例えば *az-úta* 「ミルク」は女性名詞である。また、*yam-áa* 「鼠」は男性名詞であるが、*adan-íta* 「猫」は女性名詞である。

また、カンバタ語での実際の使用における普通名詞の代表形は絶対格の形であり、この点ではウォライタ語と似ている。

表 (2-2) の型の名称において欠番となっているものがあることから分かるように、Treis (2007) にはこの他の型も挙げられている。但しそれらは、実例が1つしか見付かっていないも

² 筆者の理解する限り、eで始まる語尾とoで始まる語尾は自由変異である。

のであったり、固有名詞や呼び掛け、及び何等かの感情の籠められた表現 (Treisの用語だと *terms belonging to affectionate language*) に使われるものであったりするの、ここでは無視しても構わないだろう。尚、ウォライタ語では地名名詞と人名名詞はそれぞれ普通名詞と似てはいるが異なった活用体系を示す。

表 (2-2) に挙げた形に加え、指示対象が複数存在することを明示的に表す形が存在する。それら有標な複数形は、例えば語幹最終子音を重化させたうえで語尾-áta (絶対格の場合) を付加したり、語幹最終子音を可能であれば重化させた上で語尾-aakkáta (絶対格の場合) を付加したり、といった手段で作られる。どの名詞からどのタイプの複数形が可能なかは別途記述が必要であるが、表 (2-2) に挙げられた型と対応しているのではない。また、表 (2-2) の形で複数の指示対象を指し、単一の指示対象を指す場合には別途「単一数形」を使用しなければならないものもある。この点についても別途記述が必要であるが、これまた語形変化の型との対応が見られる現象ではない。以上の理由から、本稿ではこれら有標な複数形や単一数形は考慮しない。

(2-2) カンバタ語普通名詞語尾

男性

| | ABS | NOM | OBL | DAT | LOC |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| M1 | -á | ´-u | -í | -íí | ´-a |
| M2 | -í | ´-u | -í | -íí | -éé |
| M3 | -ú | ´-u | -í | -íí | ´-o |
| M6 | -áá | -óó | -éé | -éé | |
| M8 | -óó | -óó | -éé | -éé | |
| M9 | -úú | -úú | -íí | -íí | |

女性

| | ABS | NOM | OBL | DAT | LOC |
|-----|-------|-------|-----|-----|-----|
| F1a | -áta | ´-áti | -á | -áá | |
| F2a | -íta | ´-íti | -é | -éé | |
| F2b | -é | ´-i | -é | -éé | |
| F3a | -úta | ´-úti | -ó | -óó | ´-o |
| F3b | -ó | ´-u | -ó | -óó | |
| F4 | -ááta | -ááti | -áá | -áá | |
| F5 | -ééta | -ééti | -éé | -éé | |
| F6 | -óóta | -óóti | -óó | -óó | |

アムハラ語の名詞形態論は、以上の2言語に較べれば簡単である。複数形であることを示す接尾辞や、名詞に後続する接尾辞的な定冠詞等が存在するが、名詞本体が語形変化をすることは原則としてなく³、従って語形変化の点から名詞を幾つかのグループに分ける必要もない。定冠詞は男性名詞と女性名詞で形が異なるが、形態上の特徴から名詞の文法性を判断することは出来ない。

3. ウォライタ語、カンバタ語、アムハラ語の3言語で語形の類似している普通名詞

本節では、ウォライタ語、カンバタ語、アムハラ語の3言語で、明らかに語形が類似している普通名詞を扱う。どの言語もアフロアジア大語族に属するため、祖語にあった形式を引き継いでいる可能性も否めないが、これらの属する3語族は系統的に互いにそれなりに遠いことを考えると、以下に見られる類似は借用によって説明するのが妥当であろう。

アムハラ語の威信や影響力を考えると、アムハラ語からウォライタ・カンバタ両言語に借用されたものが相当数存在すると予想される。その場合、アムハラ語から個別に直接借用されたのか、アムハラ語からウォライタ語を介してカンバタ語に借用されたのか、あるいは逆にカンバタ語を介してウォライタ語に借用されたのか、それとも更に別の言語を介して借用されたのか、個別に検証する必要がある。

一方で、アムハラ語がこれら両言語から借用した可能性も否定出来ない。柘植 (1988: 452) もアムハラ語に関し、「語彙の中核をなすのは、セム語系のものとクシ語系のものである」と述べている。

本稿では残念ながらこうした大切な問題の詳細な検討は行えない。アムハラ語の最終母音別に、それぞれウォライタ語とカンバタ語のどの名詞クラスが対応しているか観察し、大雑把な一般化を行い、今後の研究のための資料としたい。

尚、ヨーロッパの言語に由来するものであっても、アムハラ語に借用されて広く使われているものはここで扱うことにする。

(3-1) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語F2a : アムハラ語i

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
|-----------|----------|-------|---------|
| bimbb-íya | bimb-íta | bimbi | 蚊 |
| sur-íya | surr-íta | surri | ズボン |
| siín-íya | siin-íta | soni | コーヒーカップ |

(3-2) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語F2a : アムハラ語e

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
|---------------|--------------|----------|----|
| dabidaabb-íya | dabdaabb-íta | däbdabbe | 手紙 |

³ 但し、少数の名詞に関し、不規則複数形が使われることがある。

| | | | |
|---------------------|-------------|---------|--------------|
| qabal-íya | qabal-íta | k'ábäle | (行政単位の一つ) |
| katikall-á aráq-íya | (h)araq-íta | arák'e | (アルコール飲料の一種) |

(3-3) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語M1 : アムハラ語e

| | | | |
|-----------|--------|-------|----|
| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
| marpp-íya | marf-á | märfé | 針 |

以上から、前舌母音で終わっているアムハラ語名詞にはウォライタ語の男性クラスE、カンバタ語のF2a型が対応しているのが原則であると言える。(3-3)にある「針」に対するカンバタ語は例外であるが、以下に見るように本節で扱う資料中においてカンバタ語普通名詞はその大半がM1型であることも関係していると思われる。尚、Lamberti and Sottile (1997: 466) によると、この語はセム語の語根r-p-?に由来している。つまり、本来語末に子音?が存在した可能性がある。

(3-4) ウォライタ語M. Class O : カンバタ語F3a : アムハラ語o

| | | | |
|-----------------------|------------|--------|-----|
| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
| biir-úwa | biir-úta | biro | 事務所 |
| daabb-úwa | daabb-úta | dabbo | パン |
| poot-úwa | fot-úta | foto | 写真 |
| shub-úwa ⁴ | shub-úta | šəbbo | 針金 |
| shibaag-úwa | sibaag-úta | sibago | 紐 |

(3-5) ウォライタ語M. Class O : カンバタ語M3 : アムハラ語o

| | | | |
|--------------------------|----------|-------------|-----|
| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
| burcukkuwaa ⁵ | burcuq-ú | bərc'ək'k'o | コップ |

以上から、母音oで終わっているアムハラ語名詞には、ウォライタ語の男性クラスO、カンバタ語のF3a型が対応しているのが原則であると言える。(3-5)にある「コップ」に対するカンバタ語は例外である。

(3-6) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語M1 : アムハラ語a

| | | | |
|------------|-----------|----------|----|
| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
| banddir-áa | baandir-á | bändira | 旗 |
| caamm-áa | caamm-á | c'amma | 靴 |
| daqiiq-áa | daqiiq-á | däk'ik'a | 分 |

⁴ Alemaayehu and Tereezaa (1991EC: 417) には shubaa という語形が挙げられている。

⁵ これは Alemaayehu and Tereezaa (1991EC: 49) に見られる語形である。

| | | | |
|-------------------------|-----------|---------|---------|
| gaazeex-áa | gaazeex-á | gazet'a | 新聞 |
| jaban-áa | jaban-á | jäbäna | コーヒーポット |
| katam-áa | katam-á | kätäma | 都市 |
| makiin-áa | makiin-á | mäkina | 車 |
| waag-áa | waag-á | waga | 値段 |
| baaqqél-aa ⁶ | baaqeel-á | bak'ela | 隠元豆 |
| qún''-aa | qunn-á | k'unna | 穀物計量用の籠 |
| shúmbbur-aa | sumbir-á | šəmbəra | ひよこ豆 |
| maarasha ⁷ | maarash-á | marāša | 鋤 |

(3-7) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語M1 : アムハラ語a

| | | | |
|-------------|----------|-----------|----|
| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
| massaar-íya | misaar-á | mässariya | 道具 |

以上から、母音aで終わっているアムハラ語名詞には、ウォライタ語の男性クラスA、カンバタ語のM1型が対応しているのが原則であると言える。(3-7)にある「道具」に対するウォライタ語は例外であるが、アムハラ語と共に、iyaで終わっていることで説明が付くと思う。むしろ注目すべきは(3-1)、(3-2)、(3-4) で見た例とは異なり、カンバタ語が男性名詞となっている点である。以下で見るように、カンバタ語が男性名詞のM1型で対応する例は多いので、女性名詞で出て来る先の例の方が量的には例外的かとも思われる。

(3-8) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語M1 : アムハラ語子音

| | | | |
|--------------|------------|----------|-------------------|
| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
| gaameel-áa | gaameel-á | gəmal | 駱駝 |
| átar-aa | atar-á | atär | エンドウ豆 |
| bír-aa | birr-á | bərr | 銀、ブル (エチオピアの通貨単位) |
| ba'ál-aa | ba'aal-á | bä'al | 祭日 |
| birát-aa | birat-á | bərät | 鉄 |
| dabitár-aa | dabtar-á | däbtär | ノート |
| damóóz-aa | damooz-á | dämoz | 給料 |
| dirqqóósh-aa | dirqoosh-á | dərək'oš | 秣 (まぐさ) |
| maxááf-aa | maxaaf-á | mäs'haf | 本 |
| paránjj-aa | faranj-á | färänj | 白人 |

⁶ Alemaayehu and Tereezza (1991EC: 20) には baa77eela (7は'tと同じ)、Lemma (1992EC: 15) には baa'elaa という語形が挙げられている。この言語では、'とqが交替することがある。

⁷ これは Alemaayehu and Tereezza (1991EC: 208) に挙げられている形である。

| | | | |
|-------------------------|------------------------|-----------|-------------|
| seexáán-aa | seexaan-á ⁸ | sayt'an | 悪魔 |
| siráát-aa | siraat-á | sər'at | 秩序 |
| shá'-aa | shiih-á | ši(h) | 千 |
| wórqq-aa | worq-á | wärk' | 金 |
| wottaaddár-aa | wottaddar-á | wättaddär | 兵士 |
| xigimít-aa ⁹ | xiqint-á | t'ək'əmt | エチオピア暦2番目の月 |
| xóóm-aa | xoom-á | s'om | 断食 |

(3-9)¹⁰ ウォライタ語M. Class E : カンバタ語M1 : アムハラ語子音

| | | | |
|----------------|----------------------------|------------------------------------|-------------|
| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
| ayyar-íya | ayyeer-á | ayyär | 天気、気候 |
| sukkaar-íya | sukk ^(w) aar-á | sökk ^w ar ¹¹ | 砂糖 |
| alám-íya | alam-á | aläm | 世界 |
| atkkíltt-íya | ataakilt-á | atkəlt | 野菜 |
| biskkiltt-íya | bishikleet-á ¹² | bisiklet | 自転車 |
| haakím-íya | haakim-á | hakim | 医者 |
| hidáár-íya | hidaar-á | hədar | エチオピア暦3番目の月 |
| hígg-íya | higg-á | həgg | 法律 |
| hosppitáál-íya | hosпитаal-á | hospital | 病院 |
| Jafán-íya | Jaapaan-á | japan | 日本 |
| kárrd-íya | kaard-á | kard | 葉書 |
| kifil-íya | kifil-á | kəfəl | 部屋 |
| madááb-íya | madaab-á | mädab | 銅 |
| maqás-íya | maqas-á | mäk'äs | 鉄 |
| maráb-íya | marab-á | märäb | 網 |
| masaláál-íya | masalaal-á | mäslal | 梯子 |
| maskkóót-íya | maskoot-á | mäskot | 窓 |
| misimáár-íya | musmaar-á | məsmar | 釘 |
| múúz-íya | muuz-á | muz | バナナ |
| pidál-íya | fidal-á | fidäl | 文字 |
| polís-íya | folis-á | polis | 警察官 |

⁸ sheexaan-á もある。

⁹ Lemma (1992EC: 171) には xigimitiyaa という語形が挙げられている。

¹⁰ horophhill-íya (ウォライタ)、horophphilaal-á (カンバタ)、awropəlan (アムハラ)「飛行機」、もここに含めて良いかも知れない。

¹¹ Kane (1990: 564) には sukkar という語形も挙げられている。

¹² bishikleet-íta もある。

| | | | |
|-----------------------------------|-----------|-----------------------|----------------|
| póóq- <i>iya</i> | fooq-á | fok' | 階 |
| qéés- <i>iya</i> | qeess-á | k'es | 僧 |
| raadóón- <i>iya</i> | raadoon-á | radiyon ¹³ | ラジオ |
| sa'át- <i>iya</i> | saat-á | sä'at | 時 (o'clock)、時計 |
| saaxín- <i>iya</i> | saaxin-á | sat'ən | 箱 |
| santtím- <i>iya</i> ¹⁴ | saantib-á | santim | 10セント硬貨 |
| sekóndd- <i>iya</i> | sekond-á | sekond | 秒 |
| si'il- <i>iya</i> | si'il-á | sə'əl | 絵 |
| síkk- <i>iya</i> | silk-á | səlk | 電話 |
| súúq- <i>iya</i> | suuq-á | suk' | 店 |
| taarik- <i>iya</i> | taariik-á | tarik | 歴史 |
| taysáás- <i>iya</i> | xisaas-á | tahsas | エチオピア暦4番目の月 |
| tembér- <i>iya</i> | tembir-á | tembər | 切手 |
| tikéét- <i>iya</i> | tikeett-á | təket | 切符 |
| utéél- <i>iya</i> | hooteel-á | hotel | ホテル |
| waraqát- <i>iya</i> | woraqat-á | wäräk'ät | 紙 |
| xarmús- <i>iya</i> | xaarmuz-á | t'ärmus | 瓶 |
| zayít- <i>iya</i> | zayt-á | zäyt | 油 |

以上から、子音で終わっているアムハラ語名詞には、カンバタ語のM1型が対応するのが原則であると言えるが、ウォライタ語は男性クラスAが対応している場合と男性クラスEが対応している場合がある。後者の方が例は多いが、前者も無視出来ない多さの例があり、例外であるとする訳にはいかない。何故ウォライタ語がこのように2つに分かれるのか、理由は全く分からない。カンバタ語に対応する語形が無い場合も含め、別途考察が必要である。

また、子音で終わっているアムハラ語名詞に関しては、以下のように例外的なパターンがいくつか存在する。

(3-10) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語F2a : アムハラ語子音

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
|------------|-----------|--------|----|
| gulbbát-aa | gulub-íta | gulbät | 膝 |

t音はウォライタ語では語幹の一部であるが、カンバタ語の場合は語尾の一部となっている。Lamberti and Sottile (1997: 368) によれば、これらはOld Cushitic¹⁵の語幹、gilub-に由来している。

¹³ 現在では *rediyo* という方が普通である。

¹⁴ *santtif-*iya**、*sántt-*iya** という語形もある。

¹⁵ Lamberti and Sottile (1997:19) では、Omotiic は West Cushitic の別名で、Cushitic の主要な語派の1つとされている。

(3-11) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語M3 : アムハラ語子音

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
|---------|--------|-------------------|----|
| kóór-aa | koor-ú | kor ¹⁶ | 鞍 |

エチオピア有数の大言語の1つで、ウォライタ語の近隣で話されているオロモ語（クシ系）でもkooaraaである（Hinsene (2009 :816) による）が、どのような関係にあるのかは不明である。

(3-12) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語M2 : アムハラ語子音

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
|------------|-----------|-------|--------|
| kurááz-iyá | kurraaz-í | kuraz | 小さなランプ |

Kane (1990: 1398) にはアラビア語でkurrāzである点、記されている。ウォライタ語とアムハラ語の対応は (3-9) に見られるパターンと同じで、不思議ではないが、カンバタ語の対応は説明が付かない。

(3-13) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語F2a : アムハラ語子音

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
|---------------|----------------|----------|-----|
| biskkíltt-iyá | bishikleet-íta | bisiklet | 自転車 |
| dístt-iyá | dist-íta | dəst | 鍋 |
| sháy-iyá | shay-íta | šay | 茶 |

「自転車」に関しては (3-9) にあるように、カンバタ語にはbishikleet-áというM1型の語も存在する。また、「鍋」に関してはLamberti and Sottile (1997: 349) がカンバタ語としてdistaという語形を載せており、同じくM1型であると思われる。これらであれば (3-9) にあるようなよくあるパターンなのであるが、F2a型の存在は説明出来ない。「茶」に関しては、アムハラ語の語末子音yを実質上前舌母音iであると考えれば (3-1) に含めることが出来る。

(3-14) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語M3 : アムハラ語子音

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | 語釈 |
|-------------|-----------|-------|-----|
| paanóós-iyá | faanoos-ú | fanos | ランプ |

Lamberti and Sottile (1997: 354) はアムハラ語を通したセム語からの広範囲に及ぶ借用である

る。つまり、オモ系とクシ系が系統的に近いと考え、通説とは異なり両者を分離させない立場である。この点、以下でも Lamberti and Sottile (1997) に言及がある場合、注意しなければならない。

¹⁶ korəččaの方が普通である。

としており、Kane (1990: 2314) にはアラビア語でfanūsである点、記されている。アムハラ語とウォライタ語の対応は、これまた (3-9) に見られるもので予想通りであると言えるが、カンバタ語が何故u母音で終わるM3型になっているのか、直前に円唇後舌母音oがあることが影響しているかとも思われるが、不明である。

以上、ウォライタ、カンバタ、アムハラ語の3言語で語形が明らかに似ている場合、よく見られるその語末の音（ウォライタ、カンバタ両言語の場合は活用のクラス（型）ということになる）の対応は以下のようにまとめられる。ウォライタ語とカンバタ語は代表形の語尾を挙げた。

(3-15)

| ウォライタ語 | カンバタ語 | アムハラ語 | |
|--------|-------|---------|------------|
| -iya | -ita | 前舌母音i/e | (3-1)(3-2) |
| -uwa | -uta | o | (3-4) |
| -aa | -a | a | (3-6) |
| -aa | -a | 子音 | (3-8) |
| -iya | -a | 子音 | (3-9) |

これが何を意味するのかは慎重に判断しなければならないが、借用に際しては、特に優勢なアムハラ語の名詞がウォライタ・カンバタ両言語に借用される場合には、原則としてこの対応に従うであろうと予想される。更には、ウォライタ語とカンバタ語の普通名詞は、以上の様な対応を示すのが、ある意味で自然であるとも予想される。この対応を念頭に、次節以降ではウォライタ・カンバタ両言語で明らかに語形の似ている（そしてアムハラ語とは語形が大きく異なっている）普通名詞を検討する。

4. ウォライタ語とカンバタ語で語形の似ている普通名詞

以下、実例を挙げる。

(4-1) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語M1

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|---------------|-------------|----|
| kaltt-áa | kalt-á | 斧 |
| xit-áa | xit-á | 煤 |
| allág-aa | allag-á | 敵 |
| bataskkáán-aa | bataskaan-á | 教会 |
| bixáál-aa | bixaal-á | 馬勒 |
| bóór-aa | boor-á | 雄牛 |

| | | |
|------------|------------|------------------------|
| dítt-aa | diitt-á | (弦楽器の一種) |
| jáál-aa | jaal-á | 友人 ¹⁷ |
| ól-aa | ol-á | 戦争 |
| xáll-aa | xall-á | ～だけ ¹⁸ |
| zérett-aa | zerett-á | 種子 |
| agín-aa | agan-á | 月 |
| barcumm-áa | barcum-á | 椅子 |
| haasáy-aa | haasaaww-á | 話 |
| hiyyéés-aa | hiyyeess-á | 貧乏 (ウォライタ) / 孤児 (カンバタ) |
| súntt-aa | su`m-á | 名前 |
| udúl-aa | udulumm-á | 臼 |
| xóqq-aa | xoqqitt-á | 高所 (ウォライタ) / 高さ (カンバタ) |

この対応が、筆者が確認出来たものとしては一番数が多い。また、(3-6)や(3-8)で見られたパターンにも合致している。

「月」以下は語幹に多少の違いが見られる。「話」に関しては、カンバタ語では *yiim-á* ~ *wiim-á* 「満ちた」、*we`ees-ú* ~ *ye`ees-ú* 「敷く」等、いくつかの語において *w* と *y* が自由に交代するということも考慮するべきであろう。「名前」に関しては、エチオピアで共通語として広く普及しているアムハラ語では *səm* である。これはアフロアジア祖語に遡ると考えられ、Ehret (1995: 160) は **süm-/*sim-* (*ü, i* は上昇調の母音) と再建している。アムハラ語にも似た語形が存在するという点では本節で扱うべきではないのかも知れないが、アムハラ語の影響と考えるべき理由が殆どないため、取り敢えずここで扱った。

これら (の一部) が仮に両言語間の借用関係にあるとして、その方向を明らかにするのは容易ではない。「友人」に関し、ウォライタ語では一般に *j* 音で始まる語が極めて少ないことを考えるとウォライタ語が借用したと思われるが、「種」に関し、*-ett-* という語幹形成接辞をししば利用するのはウォライタ語であることを考えるとカンバタ語の方が借用したと思われる。お互いに影響し合ってきたのであろう。

(4-2) ウォライタ語 M. Class A : カンバタ語 F1a

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|------------|-------------|----------------------------|
| bakkann-áa | bakkann-áta | 5セント硬貨 |
| maaxaan-aa | maaxaan-áta | 荷積み用の馬 (ウォライタ) / 雌馬 (カンバタ) |
| xóqq-aa | xoqq-im-áta | 高所 (ウォライタ) / 高さ (カンバタ) |

¹⁷ ウォライタ語の場合、これに加えて割れを受ける男児の目を覆う役割を担う人のことも指す。

¹⁸ 必ず修飾語を必要とするが、形態面では間違いなく普通名詞である。

第3節のデータには見られなかったパターンであり、カンバタ語でF1a型が現れている。

カンバタ語では語幹末の子音を重化させて-áta語尾を付加することにより有標な複数形を作ることが頻繁に行われるが、「5セント硬貨」の形はその事が影響しているかも知れない。

ウォライタ語maaxaan-aaのアクセントは筆者の不注意により、不明である。カンバタ語の名詞の文法性とその指示対象の自然性は上述の通り完全には一致しないが、その一方で自然性が女性のもものが女性名詞で表されることはこの言語では極めてよく見られることでもあるから、M1型ではなくF1a型になっている理由はその辺りに求められるかも知れない。

カンバタ語のxoqq-im-átaに見られる-im-は形容詞や動詞から名詞を派生する接尾辞である。自動的にF1a型の語尾を取るの、ここに入れるのは問題があるかも知れない¹⁹。

(4-3) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語F4

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|-----------|-------------|------------------|
| mashsh-áa | mashsh-ááta | 庖丁 ²⁰ |
| maláát-aa | mal-ááta | 印(しるし) |

第3節のデータには見られなかったパターンであり、カンバタ語でF4型が現れている。筆者の基礎語彙調査の結果では、この型に属する語はかなり少ないことを考えると²¹、不思議な対応である。

「印」に関しては、両言語で語幹と語尾の切れ目が異なっている。これにより、アクセントの位置が両言語で一致するが、上記の諸例から分かるように、一般に両言語で語形が似ている普通名詞のアクセントの位置が一致していると言うことは出来ず、アクセントに説明を求めることは出来ないと思われる。尚、Lambert and Sottile (1997: 460) によるとこれは比較的古いエチオピアセムからの借用で、アムハラ語のmälákkätäという動詞を参照させているが、実際には派生接辞の付いていないこの形の動詞は使われない。挙げるとしたら名詞mälákkät「印」を挙げべきであろう。

(4-4) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語M3

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|------------|-----------|--------------------|
| bayr-áa | bahir-ú | 年上の兄弟 |
| borkkót-aa | borkaan-ú | 枕 |
| -ánchch-aa | -aanch-ú | ～する人 ²² |

¹⁹ 尚、xoqq-という形容詞や動詞は見付けていないが、xóqqiという、オノマトペ的でy-ú「言う」という動詞と組み合わせられて「起きる」という意味を表すものが見付かっている。これはpreverbだとかcoverbだとか呼ばれて来たものであり、形容詞でも動詞でもないが、形容詞に準じるものと考えても良いであろう。

²⁰ 英語のmachete、フランス語のmachetteとの関係は不明。

²¹ 確実な例は他にga'-ááta「明日」、od-ááta「物」だけである。

²² これは普通名詞というよりは、普通名詞を派生する接尾辞である。ウォライタ語の-ánchch-aaは名詞語幹に、

これは (3-11) で見られたパターンに合致するが、かなり稀なパターンであった。

「～する人」は脚註で述べたような事情もあり、ここで扱うのは適切ではないかも知れない。「年上の兄弟」、「枕」も語幹の形が若干異なっている。

以上の他に、ウォライタ語meqétt-aa、カンバタ語miq-ichch-ú「骨」を加えても良いかも知れない。Lamberti and Sottile (1997: 458) によると、前者はOld Cushiticの語幹*mek'-からの派生であり、Old Cushiticの*-taaという接尾辞が付いたものである。カンバタ語の-ichch-は単一数形を作る接尾辞であり、男性形の場合、自動的にM3型となる。両言語とも、接尾辞を伴わない形は見付かっていない。ウォライタ語ifitt-áa「扉」、カンバタ語ifichch-ú「蓋」もLamberti and Sottile (1997: 280) の挙げる広範囲に及ぶOld Cushiticの語幹*ʔub-「塞ぐ、覆う、閉じる」と同様にして関連付けられよう。

(4-5) ウォライタ語M. Class A : カンバタ語F2a

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|---------|------------|----|
| baac-áa | baacas-íta | 鎌 |

(3-10) に見られたパターンと合致するが、それは1例しか見付かっていないものであり、また、語幹が両言語で完全に一致している訳でもない、問題を孕む例であった。「鎌」の語幹も両言語で一致していない。単純な借用関係ではないのかも知れない。

(4-6) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語M1

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|-----------|--------|--------------------------|
| duunn-íya | duun-á | 丘、塚 (ウォライタ語) / 山 (カンバタ語) |
| dúúú-íya | duud-á | 啞者 |
| qóóq-íya | qooq-á | 盲人 |

これは例の非常に多い、(3-9) で見られたパターンと合致する。その他、(3-3) や (3-7) にも見られたパターンである。

(3-9) には、ウォライタ語やカンバタ語がアムハラ語から借用したであろうと推測される語彙が多いが、そうすると、何か子音で終わっている語を何処かの言語から両言語が借用した、との推測も成り立ちそうである。尚、「啞者」はアムハラ語ではdidaであるが、上記語形と関係があるとすると、第3節では見られなかったパターンを形成してしまう。

(4-7) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語F2a

カンバタ語の-aanch-úは主として動詞語幹 (時として名詞語幹) に付く。

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|--------------|--------------|-------------------|
| har-íya | harr-íta | 驢馬 |
| maxin-íya | maxin-íta | 塩 |
| mol-íya | mool-íta | 魚 |
| shaat-íya | shaat-íta | (皿の一種) |
| shukkaar-íya | shukkaar-íta | 薩摩芋 ²³ |
| bááll-íya | baall-íta | 羽 |
| mán''-íya | ma'n-íta | 場所 |

(3-1)(3-2)、即ちアムハラ語が前舌母音で終わっている時のパターンに合致する。

カンバタ語のmool-íta「魚」は、筆者のインフォーマントによると純粋なカンバタ語ではない、とのことである²⁴。また、(3-2) に関しては、カンバタ語がアムハラ語から借用したと考えるのが自然であると思われ、そうであるならば、e語尾名詞を借用に際してF2a型にして取り入れた、ということになる。そして、ウォライタ語の男性クラスE名詞は、活用形によってはeで終わるし、e母音こそが語尾の基底にある母音であると考えられる。以上を考慮すると、カンバタ語がウォライタ語（乃至ウォライタ語に系統的に近い他のオモ系の言語）から借用した、と考えると矛盾がないが、この方向が正しいのか否か、別の傍証が必要だろう。

(4-8) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語F3a

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|----------|----------|----|
| móóq-íya | mooq-íta | 匙 |

第3節には見られなかったパターンであるが、強いて言えば (3-14) の亜種であろう。見付かっているのはこの1例のみである。語幹の次が原則として非円唇前舌母音であるウォライタ語の男性クラスE名詞（呼格が-oo語尾を取ることがあるが、実際に匙が呼び掛けの対象となることは滅多にないと思われる）と、語幹の次が円唇後舌母音であるカンバタ語のF3a型が対応しているのは不思議である。ウォライタ語でóóq-uwaという音連続が、あるいはカンバタ語でooq-ítaという音連続が許されない、という可能性は検討に値する。確かにそうした語形を持つものは今までに見付かっていない。だが、ウォライタ語にはmúq-uwa「蝶」、カンバタ語にはboloq-íta「緑豆」という普通名詞が存在するので、そうした音韻的な制限があるとは考え難い。

(4-9) ウォライタ語M. Class E : カンバタ語F5

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|--------|-------|----|
|--------|-------|----|

²³ (3-9) に挙げられている「砂糖」とは語幹が若干異なり、語尾の対応も異なる。因みにアムハラ語で「薩摩芋」は *sakk'ar dannačč* (砂糖・じゃが芋)。

²⁴ *qurxummeem-áta* 「魚」という語がある。*qurtúmmi y-ú* 「潜る」と関係していると思われる。

xirqqayy-íya xorq-ééta 鞭

これも第3節では見られなかったパターンで、実例はこの1つしか見付かっていない。但し、F5型はF2a型の亜種と考えられる可能性がある。即ち-éétaの-éまでが本来の語幹で、éetaがítaに由来すると考える可能性である。対応するウォライタ語を見ても、語幹が半母音で終わってるのでこの可能性は否定出来ない。すると (4-7) と同じパターンであると見做せる。

(4-10) ウォライタ語M. Class O : カンバタ語M1

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|-----------|--------|----|
| xaph-úwa | xaph-á | 根 |
| bóncc-uwa | bonx-á | 葉 |

これは第3節には見られなかったパターンである。但し、第3節のデータから明らかのように、カンバタ語は語形の類似した名詞がウォライタ語とアムハラ語にある場合、それはM1型であることが多い。その関係で説明出来るかも知れない。

(4-11) ウォライタ語M. Class O : カンバタ語M2

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|-----------|--------|----|
| hoomm-úwa | homb-í | 泡 |

これも第3節に見られなかったパターンである。Lamberti and Sottile (1997: 389)によると、これらはOld Cushiticの語幹*kumb-に由来する。

(4-12) ウォライタ語M. Class O : カンバタ語M3

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|----------------------|--------|------------------------------|
| bóll-uwa | ball-ú | 義父 (ウォライタ) / 義父、義理の息子 (カンバタ) |
| kaduwa ²⁵ | kad-ú | 犁轆 (ねりぎ) |
| zókk-uwa | zakk-ú | 背中 (ウォライタ) / 後ろ (カンバタ) |

これは (3-5) に見られた稀なパターンに合致する。

ウォライタ語の「義父」に関しては、Lamberti and Sottile (1997: 320) はOld Cushiticの語幹*ball-「義理の親戚」に、ウォライタ語の「背中」に関しては、Lamberti and Sottile (1997: 560) はOld Cushiticの語幹*s(h)unk-「背中、肩」にそれぞれ由来するとしている。

²⁵ Alemaayehu and Tereezaa (1991EC: 167) に見られる形。

(4-13) ウォライタ語M. Class O : カンバタ語F3a

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 語釈 |
|-------------|-------------|---------------------|
| met-úwa | met-úta | 問題 |
| sulss-úwa | suls-úta | (料理の一種、アムハラ語でkətfə) |
| múchch-uwa | muchch-úta | (料理の一種) |
| bullúkk-uwa | bullukk-úta | 毛布 |

これは (3-4) に見られるパターンと合致する。(3-4) にある例を見る限り、o母音で終わっているアムハラ語名詞をウォライタ・カンバタ両言語が借用した、と考えたくなるが、(4-13) の例は「問題」以外、かなり地域文化に根差したものと思われ、第三の供給源があると断じることとは出来ない。Alemaayehu and Tereezza (1991EC: 230) にもmuchchuwaaはウォライタの伝統的な料理であると記述されていること、ウォライタ語男性クラスO名詞は活用形によってはoで終わるしo母音こそが語尾の基底にある母音であると考えられること、借用に際してo母音で終わる名詞をカンバタ語はF3a型にすると考えられること(アムハラ語からカンバタ語への借用が想定される (3-4) の例参照)、等を考慮してウォライタ語からカンバタ語に借用されたと考えても矛盾はないが、確証もない。

ウォライタ語の男性クラスO名詞に関しては、他に、ウォライタ語káll-uwa、カンバタ語kall-im-áta「裸」、という対が見付かっている。カンバタ語の-imに関しては(4-2)の下で述べた通り、自動的にF1a型の語尾を取る。派生の元になった語形は筆者が訳き忘れたため、分からない。以上のような問題があるが、ウォライタ語の男性クラスOとカンバタ語のF1a型の対応自体は第3節で見られなかったものである。

5. ウォライタ語とカンバタ語の普通名詞の対応

第3節では、ウォライタ、カンバタ、アムハラ3言語を通じて検討したが、ここでそのデータからアムハラ語に関する情報を取り去り、改めてウォライタ語とカンバタ語の活用の型の対応、即ち語末の音の対応を纏めてみると、以下のようになる。実例が複数存在する4つのパターン(●を付した)が基本的なもの、それ以外の実例が1つしかない対応が例外的なもの、と考えてよいだろう。第4節では見られなかったパターンを示すものには★を付した。

(5-1) 対応するアムハラ語が存在する場合のウォライタ語とカンバタ語の普通名詞の対応

| ウォライタ語 | カンバタ語 | 実例数 | 番号 |
|--------|-------|-------|---------------|
| -aa | -a | 12+17 | (3-6) (3-8) ● |
| -aa | -ita | 1 | (3-10) |
| -aa | -u | 1 | (3-11) |

| | | | |
|------|------|--------|----------------------|
| -iya | -ita | 3+3+3 | (3-1) (3-2) (3-13) ● |
| -iya | -a | 1+1+39 | (3-3) (3-7) (3-9) ● |
| -iya | -i | 1 | (3-12) ★ |
| -iya | -u | 1 | (3-14) ★ |
| -uwa | -uta | 5 | (3-4) ● |
| -uwa | -u | 1 | (3-5) |

一方、第4節で扱った、対応するアムハラ語が存在しないものに関しては、以下のようにまとめられる。★が附されているのは、(5-1)（即ち第3節のデータ）には見られなかったパターンを示すものである。(5-1) で基本的と見做されたパターンを示すものには同じく●を附した。

(5-2) 対応するアムハラ語が存在しない場合のウォライタ語とカンバタ語の普通名詞の対応

| | | | |
|------|-------|-----------------|----------|
| -aa | -a | 18 | (4-1) ● |
| -aa | -ata | 3 | (4-2) ★ |
| -aa | -aata | 2 | (4-3) ★ |
| -aa | -u | 3 ²⁶ | (4-4) |
| -aa | -ita | 1 | (4-5) |
| -iya | -a | 3 | (4-6) ● |
| -iya | -ita | 7 | (4-7) ● |
| -iya | -uta | 1 | (4-8) ★ |
| -iya | -eeta | 1 | (4-9) ★ |
| -uwa | -a | 2 | (4-10) ★ |
| -uwa | -i | 1 | (4-11) ★ |
| -uwa | -u | 3 | (4-12) |
| -uwa | -uta | 4 | (4-13) ● |

(5-2)、即ち第4節で扱ったデータにはアムハラ語からの借用が含まれているとは考え難い。それではこれらの語形の似た対の存在は何を意味しているのか、具体的には両言語間でどのような借用関係があったのか、あるいはどの様に祖形を再建出来るのか、別途検討が必要であるが、(5-2) をざっと見て分かることは、(5-1)、即ちアムハラ語からの借用の可能性が高いものの対応に較べて、パターンの種類が多い、ということである。問題があるので表には入れていないが、第4節の最後で扱った、ウォライタ語-uwa、カンバタ語-ataという対応もある。当然、(5-1) では見られないパターンも存在し、★が示すように6つ見付かっている。取り分け、カンバタ語がF1a型（-ata語尾）、F4型（-aata語尾、F1a型の亜種の可能性がある）を示すものは実例も1つで

²⁶ この他に、「骨」、「扉／蓋」の例がある。

はなく、注目される。但し、(5-1) にのみ見付かっているパターンも2つ存在する。

また、(5-1) で圧倒的に実例が多い、ウォライタ語-*iya*、カンバタ語-*a*という対応が (5-2) では有意に少ないのも注目される。第4節でも述べたが、このパターンが借用に特徴的なものだとすると、(4-6) にあるウォライタ語-*iya*、カンバタ語-*a*という対応を示す例もアムハラ語以外の第3の言語からの借用の可能性を検討する必要がある。

アムハラ語からの借用が想定される (5-1) に較べてそうではない (5-2) では、カンバタ語が M3型 (-*u*語尾) となっているものが多い、ということも言えよう。すると同じくカンバタ語が M3型である (3-5) 「コップ」、(3-11) 「鞍」、(3-12) 「ランプ」等も、アムハラ語に語形の類似した名詞があるとは言え、アムハラ語から直接借用されたと断定するには慎重でなければならぬまい。

6. おわりに

本稿では、ウォライタ語とカンバタ語の普通名詞の語幹の形式が似ている場合、それらがそれぞれの語形変化上のクラス (型) に属するのか、検討した。対応のパターンは多様、複雑であり、実例の多いもの、少ないものがあることや、アムハラ語にも対応する語形があるかないかでそのパターンが若干異なって来ること等が明らかになった。

だが、それ以上の何かを明解に結論付けることは出来なかった。例えばウォライタ語からカンバタ語へ借用されたと考えても矛盾のないものはあるが、そう断定するだけの根拠は見付かっていない。両言語間には長年に亘る複雑な歴史、背景があるのだろう。

今回扱えたデータは充分であるとは言えない。見落としているものも多いであろう。ウォライタ語 *achch-áa*、カンバタ語 *inq-úta* 「歯」の様に、見た目は相当異なっても同根の可能性が考えられる場合もある²⁷。固有名詞も別途検討する価値がある。いずれも今後の課題としたい。

転写

ウォライタ語もカンバタ語も、現在当地ではラテン文字を使った表記が試みられているのでそれを尊重した。各単音に関してはウォライタ・カンバタ両言語で同じである (どちらかにしかない音を除く)。アムハラ語の転写にも伝統があり、本稿ではそれも基本的に尊重するので、ウォライタ・カンバタ両言語とは食い違いも生じている。以下にIPAと大きく異なるものを本稿に必要な範囲でまとめる。尚、ウォライタ語では *p* と *f* は自由変異の関係にあり、子音が連続する場合には後続する子音文字を2つ重ねて書く習慣がある。その他、現地の表記では現れないが、ウォライタ・カンバタ両言語に関しては高く発音される箇所を鋭アクセント「´」で示した。

ウォライタ語・カンバタ語

アムハラ語

IPA

²⁷ このことに関しては、例えば Lamberti and Sottile (1997: 275) を参照されたい。

| | | |
|----------------|----|------|
| ' | ' | [ʔ] |
| | ä | [e] |
| c | č' | [ʧ'] |
| ch | č | [ʧ] |
| j | j | [dʒ] |
| n'' (ウォライタ語のみ) | | [n'] |
| ph | p' | [p'] |
| q | k' | [k'] |
| sh | š | [ʃ] |
| x | t' | [t'] |
| y | y | [j] |

略号

ABS (absolute、絶対格。他の形が使われない所で使われる無標の格で、例えば動詞の直接目的語に使われる。いわゆる「能格 ergative」と対になる格ではない)、DAT (dative、与格)、F (feminine、女性)、INTER (interrogative、疑問格。肯定疑問文の述語として使われる形)、LOC (locative、場所格)、M (masculine、男性)、NOM (nominative、主格)、OBL (oblique、斜格。後続する名詞類を修飾する形)、VOC (vocative、呼格)。

参考文献 (EC は Ethiopian Calendar の意味)

- Alemaayehu Doogamo and Tereezaa Hayile Messqqalo (1991EC) *Wolayttatto qaalatu Amaaratto birshshettaa* [ウォライタ語—アムハラ語辞書]. Addisaaba: Tophphiya Doonatu Xinaatiyaanne Pilgettaa Ooso Keettaa, Addisaaba Yuniversttiyaa.
- Ehret, Christopher (1995) *Reconstructing Proto-Afroasiatic (Proto Afrasian): Vowels, tone, consonants and vocabulary*. University of California Publications in Linguistics, 126. Berkeley: University of California Press.
- Hinsene Mekuria (2009) *English-Oromo-Amharic dictionary*. Addis Ababa.
- Kane, Thomas Leiper (1990) *Amharic-English dictionary*. 2 vols. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Lamberti, Marcello and Roberto Sottile (1997) *The Wolaytta language*. Studia Linguarum Africae Orientalis, Band 6. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Lemma Didana (1992 EC) *Wolaytigna-Amharic English dictionary*. Birhanuna Selam.
- Treis, Yvonne (2007) *Towards a grammar of Kambaata: Phonology, nominal morphology, and non-verbal predication*. Unpublished doctoral dissertation, University of Cologne.
- 柘植洋一 (1988) 「アムハラ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第一巻 世界言語編 (上)』451-454. 東京:三省堂.

Wakasa, Motomichi (2008) A descriptive study of the modern Wolaytta language. Unpublished doctoral dissertation, The University of Tokyo.

若狭基道 (2012) 「ウォライタ語」 塩田勝彦 (編) 『アフリカ諸語文法要覧』 69-80. 広島 : 溪水社.

Correspondences between Common Nouns in Wolaytta and Kambaata

Motomichi, WAKASA
motomichiwakasa@nifty.com

Keywords: Wolaytta, Kambaata, Amharic, Afroasiatic phylum, borrowing, Ethiopia

Abstract

Wolaytta (Omotic, Afroasiatic phylum) and Kambaata (Cushitic, Afroasiatic phylum) are languages spoken in southwestern Ethiopia. Common nouns in these languages are classified into several classes (types) with respect to inflection. This paper demonstrates correspondences between the inflectional classes (types) of common nouns whose stem forms are either similar or the same in both the languages. Although the patterns of correspondences are complex, there are different tendencies depending on whether or not Amharic (Semitic, Afroasiatic phylum), which is widely used in Ethiopia as a lingua franca, also exhibits a similar form.

(わかさ・もとみち

跡見学園女子大学兼任講師／白鷗大学非常勤講師／東京外国語大学非常勤講師)